

震災、放射能、日本人、そして倫理

東日本大震災から1年を機にした意識調査の分析から

海野裕 (IMC コンサルタント)

はじめに

この論考を認めているのは2012年5月。2011年と2012年の2回にわたる大規模な倫理意識調査の報告に当たり、この1年と少しを振り返ってみる。2011年の3月11日、あなたはどこで何をしていただろうか。筆者は東京都台東区で海外から日本に新たに導入する商品についての打ち合わせを行っていた。14時46分に始まった大きな横揺れ。それは次第に大きくなり、しかも断続的に長く続いた。私たちはビルから近隣の駐車場に避難し、また建物に戻り、また避難するということを繰り返した。東京都台東区の駐車場でも停まっている自動車はグラグラと揺すられ、雑居ビルのアンテナは大きく揺れていた。何よりも不気味だったのは、地面の下がゆらゆらと波打っているのが感じられたことである。堅い地面が揺すられているのではなく、その地面自体が溶けているかのような、そんな頼りなさを筆者は感じていた。なかなかつながらなかった携帯電話にニュースのテロップが流れる。宮城県沖で大きな地震があったことをそれは伝えていた。遠く離れた東京ですらこの揺れである。東北はどんなことになっているのか。大きな不安が過る。ひとまず仕事を終え、台東区から港区にあるオフィスに向けて筆者は車を走らせた。大企業は業務を停止し、たくさんの人々が路上に溢れ、帰宅を急いでいた。東京の街はいつもとまったく違っていた。車の中のカーナビで仙台空港が津波に襲われている映像を見た。とんでもないことが起こっていることを知ったのはそのときだったのかも知れない。いまでもその映像は見ることができる。しかしライブ映像でそれを見たときの衝撃を筆者は忘れることはないだろう。オフィスに戻るとコピー機は動き、パソコンやモニター、資料や書籍が床にばら撒かれていた。家族やスタッフに怪我がなかったのは幸いだったが、当然のごとくスタッフは帰宅困難者となった。3月11日の夜は余震とラジオの音声、インターネットのストリーミングと共に過ごした。その後、気仙沼の沿岸火災、そして福島第一原子力発電所のクライシスと地獄のような情報を私たちは普通に受け止めなくてはならなかった。2万人に上る死者・行方不明者、避難を余儀なくされている10数万人の悲しみ、やるせなさを私たちはこの1年間共有してきた。

「日本についての意識調査」を行ったのは2011年の2月後半である。その直後に東日本大震災が襲った。この調査の分析を進めるに従って、震災後の被災者の姿や義捐金、ボランティア、そして国外から寄せられる慰めや同情、そして感嘆の声に対して、先の調査結果がある種の予言のように感じられるようになったのである。日本人の美德について、日本人は既に分かっている。そして、その美德が震災という絶望的な状況においてもしっかりと発現されているのだ。さらに驚いたのは、日本人が今後捨て去るべきものとして、悪しき情勢主義や事なかれ主義、付和雷同性や組織偏重主義などが既にここに現れていたのである。震災後の日本政府の被災者支援や復興計画、原子力発電所の事故に対する総括と今後のエネルギー政策などへの指針の発信などはいずれも十分とは思えず、2011年の意識調査の結果、多くの国民が変えていくべきと考える従来の悪しき日本流を地で行っているように見える。2011年3月からの1年強、筆者を含む私たちは日本を襲ったこの恐るべき試練、そしてそれに付随して巻き起こる様々な状況をつぶさに見てきた。この1年はただの1年ではない。かつて経験したことのない、あらゆることに思いを馳せ、あらゆることについて深く考えさせられる1年だったのだ。そんな時期だからこそ、2011年とほぼ同じ設計による意識調査を2012年の3月にも実施してみたいと考えたのである。この極めて特異な環境に置かれた私たち日本人は、日本と日本人についてどのような認識を持っているのか。またこの

タイミングでの日本人の倫理意識はどのような状況か。また東日本大震災と原子力発電所の事故による放射能問題について、私たち日本人はどのような意識を持っているのか。これらの問題意識に応えるべく、2012年3月の調査は実施された。2011年と2012年という極めて特殊な2年間の調査結果は私たちにとっても貴重な資料となるはずである。

注) 筆者はこの小論中で多用する次の単語について以下のような概念規定を行っている。

倫理 : 共同体で共有している規範

倫理意識 : 調査の対象となっている日本人の「倫理」に関する共感などの意識全般

倫理観 : 倫理の中のある一定の意味合いを持つ価値の集合

倫理性 : 倫理を維持強化しようとする性向、或いは倫理を高いレベルで遵守する性向